東洋文庫 426

幸若舞 3

敦盛・夜討曾我他

荒木繁
池田廣司
山本吉左右
編注

平凡社

荒木　繁（あらき　しげる）
1922年茨城県生。1947年東北大学法文学部卒。現職：和光大学人文学部教授。専攻：中・近世文学。主著・論文：『説経節』（共編・平凡社『東洋文庫』），「中世末期の文学」（岩波講座『日本文学史』），「曾我物の幸若舞曲と『曾我物語』」（『和光大学人文学部紀要』12号・昭53）。

池田　廣司（いけだ　ひろし）
1922年大阪府生。1948年東京文理科大学文学科卒。現職：和光大学人文学部教授。専攻：中世文学。主著・論文：『古狂言台本の発達に関しての書誌的研究』（風間書房），『日本の古典芸能・狂言』（共編著・平凡社），「幸若舞曲『高館』の校本研究」（『和光大学人文学部紀要』13号・昭54）。

山本　吉左右（やまもと　きちゑう）
1935年大阪府生。1964年法政大学大学院人文科学研究科修了。現職：和光大学人文学部教授。専攻：日本文学。主著・論文：『説経節』（共編・平凡社『東洋文庫』），「口語りの論」（『文学』昭51・10～11月，52・1月）。

幸若舞 3〔全3巻〕　東洋文庫 426

1983年10月11日　初版第1刷発行

定価　1,600円

編注者　荒木　繁
　　池田廣司
　　山本吉左右

東京都千代田区三番町5番地
発行者　下中邦彦

印刷　東洋印刷株式会社
製本　株式会社石津製本所

発行所　郵便番号102　東京都千代田区三番町5番地
電話 03-265-0451
振替・東京8-29639　株式会社　平凡社

© 株式会社 平凡社 1983　不良本は，直接読者サービス係でお取替え致します(送料小社負担)。
Printed in Japan

凡　例

現存する幸若舞のうち、物語的興趣のあるものを選んで、三冊とし、1には「入鹿」「大織冠」「百合若大臣」「信太」「満仲」「築島」、2には「文覚」「景清」「八島」「高館」、3には「烏帽子折」「敦盛」「和田酒盛」「夜討曾我」を収めた。

本書の本文作成にあたっては、松本隆信氏によって『幸若小八郎正本　幸若舞曲　三十六種』（昭和四八年一〇月、汲古書院）と称して影印公刊された、慶応義塾図書館現蔵の伝幸若小八郎本を底本とし、それにないものは内閣文庫本等を用いたが、読みやすくするために、次のように手を加えた。

一、底本としたテキストに欠丁や脱文があるばあい、またそれを補うことによって前後の関係がより理解しやすくなると思われるばあいは、〔　〕して他のテキストで補い、後注でそのテキスト名を記した。

一、底本の文章に誤字、脱字、かなづかいの誤りなどがあるばあいは、訂正した。

また、文意の通らない箇所は、他のテキストを参考にして訂正し、その旨を後注でことわった。

一、章指（さし・ふし・くどき・ことば等）の注記は割愛した。

一、底本のかなに適宜漢字を宛てた。ただし、読み方のまぎらわしいものには底本のかなを振りがなとして残した。

一、底本の漢字のうち、読み方がまぎらわしい字、送りがなが省略されて読みにくい字、こんにちの普

通の読み方と異なる字等には、それぞれ歴史的かなづかいによる振りがなを付し、（　）でかこんだ。

また、特異な宛て字、異体字は、通行の文字に改めた。

一、適宜改行し、句読点を付し、会話等の部分には「　」を施した。ただし、地の部分と言葉の部分とが混然としている語り物の性質上、「　」でかこむのには多少の無理をおかさざるを得なかった。

一、難解と思われる箇所には、目ざわりにならない程度で（　）でかこんだ語注を入れた。

また連声のばあいは、例えば「玉の冠、石の帯、御衣もろともに脱ぎ捨て、金札を書き添へて」（夜討曾我）と記述すべきところを発音どおりに「玉の冠、石の帯、御衣もろともに脱ぎ捨て、金札と書き添へて」としているところも、できるだけ原本を生かす方針にしたがって、本書では「玉の冠、石の帯、御衣もろともに脱ぎ捨て、金札と（を）書き添へて」とした。

一、校異は、あるいは底本を補正し、あるいは文意の理解を助け、あるいは他本の特色を示しているとみとめられる部分に限定し、後注に掲げた。

なお、校合に用いたのは次の諸本である。

毛利家本（略称、毛本）
内閣文庫本（略称、内本）
上山宗久本（略称、宗本）
大頭左兵衛本（略称、大頭本）
大江本・大江別本
関西大学本（略称、関本）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

一、後注には、用例や資料をできるだけ挙げて説明するようにしたが、紙面の関係で簡単にしたり省略したりしたものもある。そのさい用いた略号は、次のとおりである。

『類従』→『群書類従』（正篇）
『続類従』→『続群書類従』
『大正蔵』→『大正新脩大蔵経』（経典番号を注記した）
『仏全』→『大日本仏教全書』（経典番号を注記した）
『室物』→『室町時代物語集』（作品番号を注記した）
『室大』→『室町時代物語大成』（作品番号を注記した）
『説正』→『説経正本集』（作品番号を注記した）
『盛衰記』→『源平盛衰記』（蓬左文庫本）
『邦訳日葡』→『邦訳日葡辞書』
『日国大』→『日本国語大辞典』
『岩古』→『岩波古語辞典』

なお、「日本古典文学大系」「日本思想大系」所収の作品は、その本文を用いた。

一、挿絵は、内閣文庫蔵の刊本「舞の本」・大東急記念文庫蔵の刊本から掲載させていただいた。

この本は、荒木繁・池田廣司・山本吉左右の共同研究の成果であるが、原稿の作成にあたっては、底本の翻字・諸本の校合は池田が担当し、それをもとに荒木が本文を作成した。後注は、「烏帽子折」は山本、「敦盛」は池田、「和田酒盛」「夜討曾我」は荒木が分担した。ただし、「解題」は、荒木が自己の

責任において執筆したものである。

幸若舞の注釈は、今までまったく手がけられていない領域であるので、私たちの仕事も、多くの不明の箇所をそのまま残さざるを得なかったし、また誤りも多いことと思う。読者のかたがたの御叱正をお願いしたい。

最後に、底本の使用を御許可いただいた、慶応義塾図書館、毛利報公会博物館、瀬高町大江の幸若舞保存会、松本隆信氏、村上学氏、汲古書院、および挿絵の掲載を御許可いただいた内閣文庫と大東急記念文庫の御配慮に対して、それぞれ御礼申し上げたい。

目次

烏帽子折……一
敦盛……七一
和田酒盛……一三五
夜討曾我……一八一
解題（荒木繁）……二六七

烏帽子折

抑　比は安元元年三月中旬に、源の牛若殿鞍馬の寺を御出であり、今日悦に近江なる野路の宿にて、吉次信高に行き合はせ給ふ。その日の泊りは鏡の宿、吉次が宿は菊屋と聞こゆる。

鏡の宿の遊君、雑餉構へ（酒肴を用意し）吉次殿をもてなす。さる間、吉次〈世に有り顔なる風情にて〉、順の盃下し逆の盃飛ばせければ、その後は酒盛になる。あらいたはしや、牛若殿は人目をつつませ給ふ間、切戸のわきにすごすごと、ただ一人たたずみ給ふ。爰に平家の侍大将監物太郎頼方、悪七兵衛景清、〈飛弾の三郎左衛門〉、早馬に乗って番場の宿を触れて通りけるは、「この路次（道筋）を、十六七の少人（少年）の通らせ給ふ事のあらば、都へ御供申し上りたらんずる輩に、上下を選まず勲功あるべし」と触れて、その日に都へ通る。

牛若殿聞こし召し、「〈あら口惜しや〉、この儀にて有るべくは、何しに鞍馬をば出でけるぞや。それ八正の大路広しと申せども、年にも足らぬ牛若が身の置所のなきこそ、何よりもって口惜しけれ。あう思ひ出だしたり。ただ今は児とこそ触れて候へ。男と触れてあらばこそ。所詮男に成って下らばや」と、思し召し、〈宿の〉下女を近づけ、「なう、此辺に烏帽子折ばし候か」。下女承り、「今日都より下らせ給ふ人の、是にて烏帽子を御尋ね候や。さり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

ながら御望みにて御座候はば、あの向ひなる竹虎落の内こそ〔五郎太夫と申して〕、烏帽子の上手にて候へ」。牛若斜におぼしめし、虎落の内へ尋ね入って、「案内申さう」。内よりも「誰そ」と答ふる。「苦しうも候はず。吉次信高の供して下る冠者にて候が、烏帽子の所望に参りて候」。その時烏帽子折牛若殿を請じ申し、烏帽子箱取り出だし、「冠者殿の召されうずる烏帽子は、大皺候か小皺候か、新せい様、当世様、いかやうなるを召されうぞ、御好み候へ（注文なさってください）。やがて折ってまゐらせう」。牛若殿聞こし召し、「〔あら口惜しや〕、烏帽子はただ黒ければ黒しとばかり心得つるに、あまたの名の有りける事よ。なにとがな折らせうな。〔あう〕思ひ出だしたり。我等が先祖は左折を召さるると承り及んであれば、人数ならぬ牛若も、左へ折らせて着ばや」と思し召し、「なう太夫殿、此冠者が着うずる烏帽子は、それなる大皺の、粒のちっとあららかなるを、一くせくせませ、雛形にあひをあらせ、櫛形をいがいがと、一揉め揉めて、左へ折ってたび候へ」。

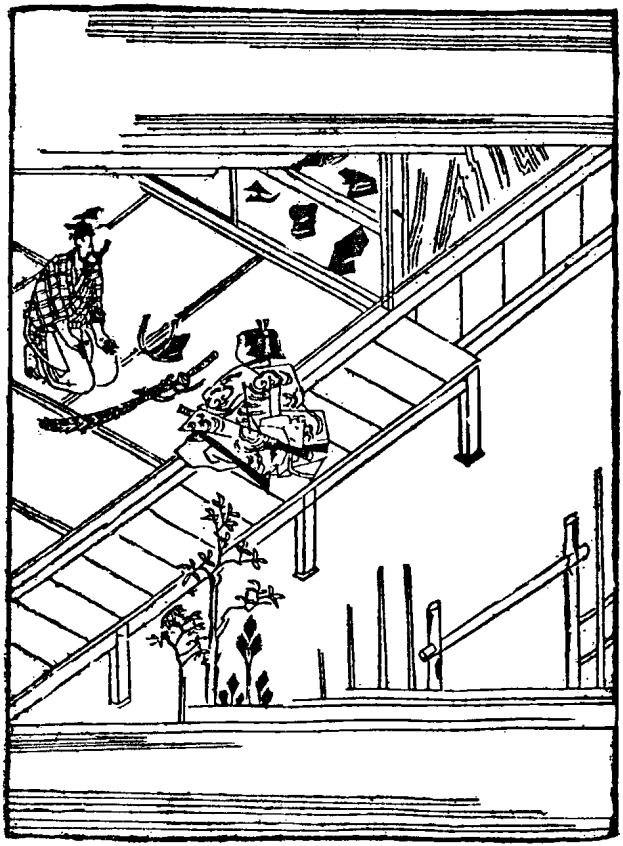
その時、烏帽子折がもっての外に腹を立て、「さればあのやうなる下臈に物を好ますれば、わが身のくはくはの程を知らず。事もかたじけなや、左折を召されうずる人は、〔皆源氏の御子孫なり〕一年尾張の国野間の内海にて失せ給ひし左馬頭義朝、その御子にて御座有りし嫡子悪源太義平、次男朝長、三男頼朝、四郎は阿野の御曹司、五郎は遠江の蒲の御曹司範頼、六は醍醐の寺の京の君、七は園城寺の悪禅師の君、八男に当たらせ給ふ当時鞍馬寺に

御座ある、牛若殿様こそ召されうずるに、やう、吾殿原が様なる三界流浪の、吉次が供する冠者が、左折を着うずる事思ひもよらぬ所望かな」。牛若をかしく思し召し、「仰せはさにて候へど、奥へまかり下らうず関々泊々にて、左折を着たるよと、人の咎めのあらん時、『都の宿に古き烏帽子のありつるを、所望して着て候が、左折も右折も、此冠者は知らぬなり。かかるむつかしき烏帽子を、関屋に預け申す』と言うて、打ち捨てて通るならば、御身の難も有るまじき。わっぱが科ものがるべし」。烏帽子折承り、「如何様是はやうある人（わけのある人）の言葉づかひぞ」と思ひ、「あう一旦は申すまで」と言うて、左へ折りすましてまゐらする。

牛若殿は烏帽子取りまはし御覧じて、「よい烏帽子にて候が、一つの難が候」。太夫聞いて、「地に難が候か、皺にくせが候か。雛形櫛形小結所、いづくに難が候ぞ」。牛若殿聞こし召し、「いづくに難も候はぬが、我所望のごとく烏帽子をば折らせまゐらせ、〈折節〉代（代金）を持ち合はせざるが、一つの難で候」。太夫聞いて、からからとうち笑ひ、「あらことごとしの冠者殿が申しごとや。あの吉次殿は、一年に一度、二年に二度の下り上りする。その供して下る冠者なれば、心安く思はれよ。冠者殿が奥はなむけに取らせうぞやう」。牛若殿聞こし召し、「世にあり顔なる取らせ言葉かな（人を見くだしたようなくれてやるといった言いかただな）。牛若が世に出づるならば、家の疵とも成るべき言葉なり。太刀を取らせて行かうずが、それ

は千五百里の道の用心も欠くる。刀を取らせて行かばや」とおぼしめし、源氏御重代のこんねんどうの御腰物を、取り出ださせ給ひて、「なう太夫殿、此刀をば烏帽子の代とばしおぼしめすな。烏帽子の代には、明年の夏の比、奥よりもよき馬を用意申さうず。暇申して太夫殿」とて、宿に帰らせ給ふ。

その後、烏帽子折女房を近づけ、「此年月かかる下細を仕り、身命を助かるを、されば、仏神三宝も不便におぼしめさるるによって、此刀を給はる。見給へ、是はみな黄金ぞ。都の町にて沽却して（売り払って）、一期の中を楽々と、過ぎうずる事の嬉しさはいかに」。女房聞いて、何と物をば言はずして、太夫が持ちたる刀をただ一目見て、やがてさめざめと泣く。太夫大いに腹を立て、「不思議の女房の風情や。男の宝設けて喜ばば、ともに喜ばずして、さて我御前は何を嘆くぞ」。女房聞いて、「今は何をか包み候べき。さては只今烏帽子折らせ給ひたる冠者殿は、みづからがためには、三代相恩の主君にて御座候ひけるや。それをいかにと申すに、御身の持たせ給ひたる刀は、源氏御重代のこんねんどうと申す刀。みづからをばいかなる者と思し召すぞ。是は一年尾張の国野間の内海にて失せ給ひし義朝の御内、鎌田のためには妹なり。君にはなれまゐらせ、身の置所のなきままに、御身に契りをこめ、今年は九年に成り候。九年の情に此刀をみづからにたべかしなう。我君の奥州へとはるばるお下りましますに奥餞にまゐらせん」。太夫聞いて、ともに涙を流し、「なかなかの事かな。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb